

正岡子規著「病牀六尺」ワイド版岩波文庫 1993年4月7日刊を読む

能楽社会には家元なるものがあつて、それが技芸に関する一切の事全権を握つて居る。例へばシテの家元には金春、金剛、観世、宝生、喜多といふのがある。ウキの家元には宝生、進藤などいふのがある。そのほか大鼓の家元は誰とか、小鼓の家元は誰とか一々きまつて居る。狂言の方にも大蔵流、鷲流などそのほかにもある。さうしてこれらの家元がおのおの跋扈して自分の流儀に勿体を付け、容易に他人には流儀の奥秘を伝授せぬなどといふ事に成つて居る。けれども昔の時代はそれでも善かつたが、今日の世の中では今少し融通を付けて遣つて行かぬと、能楽界が滅びてしまひはせぬかとの懸念がある。今日では最早能役者に扶持の附いて居る時代ではないのである。それにもかかはらず各種の芸に一々家元呼ばはりなどをして居つては、人が足らないで能楽が出来ぬやうな事に成つてしまふ。其処で今日の場合に応じて行かうといふには、一人で出来るだけの芸を兼ねて遣るやうにしたらば善からうと思ふ。例へば小鼓を打つものは大鼓を打ち太鼓も打つ位のことには訳ないであろう。あるいはワキ師がハヤシ方に成つても善からう。もし出来るならばシテも遣る、ワキも遣る、ハヤシ方も遣る、狂言も遣る、さういふやうな人もあつて差支ないであらう。かういふ事をいふと昔風な頑固な人は、それは出来るものでないと拒むかも知れない、一芸に達する事さへ容易でないのに数芸に達するなんかは思ひも寄らぬ事であるなどといふであらう。それも一理がないではないが必ずしもさういふ訳のものでもない。昔の人は漢学を知つて居るものは国学を知らない。詩人は歌を作ることを知らない。歌人は俳句を作る事を知らない。昔は総てさういふ風であつたのである。それが明治に成つて見ると歌を作り俳句を作るといふ者も沢山出来て来た。詩も作り歌も作るといふ者も出来て来た。中には数学専門の人で俳句を作る者もある。して見ると能役者が二芸三芸兼ねる位の事は訳もない事といはねばならぬ。その上にその成績はどうかといふと一芸専門の者が皆達者で二芸以上兼修の者は腕が鈍いといふでもない。それは俳句界で第一流といはれる蕪村が画の方でもまた凡人にすぐれた技術を持つて居つたのでもわかる。尤もこれは誰にでも出来るといふ訳ではないから、人を強ふる訳には行かぬが、もし自分が奮発して遣つて見ようといふものがあるならば二芸でも三芸でも修めるが善いであらうと思ふ。家元なる人もまたかくの如き後進を扶けて行く事に力めて、ゆめにもその進路を妨げるやうな事をしてはならぬ。

P135 ~ 137

[コメント]

人間の能力には限界がない。亡くなる1か月前の病床で人間の能力や芸術活動の行く末を考える子規は素晴らしい生き方を残したと思う。

- 2010年5月1日 林明夫記 -